



渡辺一夫著作集 5



筑摩書房

渡辺一夫著作集5 ルネサンス雑考 下巻

一九七一年四月三十日 初版第一刷発行
一九七七年四月十日 増補版第一刷発行

著者 渡辺一夫

発行者 井上達三

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二一八

電話 東京二九一七六五一

郵便番号 一〇一一九一

振替 東京六一四二二三

印刷 株式会社精興社

製本 和田製本工業株式会社

©渡辺芳枝一九七七



ルネサンス雜考 下巻 目次

端書..... 3

A フランス・ルネサンス文芸思潮序説（一九四八年—一九六〇年）

小序（一九六〇年）..... 9

序章..... 15

第一節 ルネサンスの明暗..... 15

第二節 狂信と狂信..... 24

第三節 異端と懷疑..... 40

第一章 人間と自然（その一）..... 52

第一節 中世とルネサンス..... 52

第二節 人間の脱皮..... 61

第二章 人間と自然（その二）..... 95

第一節 地平線の拡大..... 95

第二節 自分の眼で、自分の手で..... 113

第三章 人間と宗教（思想）..... 134

第四章 人間と社会

結語

165
182

B

フランス・ユマニスムの成立（一九五〇年—一九五八年）

小序（一九五七年）

187

序章 ユマニスム humanisme という語について

191

第一章 一五一七年

206

第二章 ジャーク・ルフェーヴル・デタープル Jacques

Lefèvre d'Étaples

236

第三章 エラスムス Erasmus とルフェーヴル・デタープル

Lefèvre d'Étaples

255

第四章 ルフェーヴルの転身

269

第五章 モー Meaux の人々

288

第六章 ルウィ・ド・ベルカン Louis de Berquin について

304

第七章 ジャン・カルヴァン Jean Calvin の出発

332

第八章 ジャン・カルヴァンの回心

351

結語

386

略年表

.....

索引

.....

卷末

1

ルネサンス雑考 下巻

端 書

東京大学文学部に在職中（一九四二年—一九六二年）所謂「演習」とか「講読」とかいう授業の外に、私一人がしゃべる所謂「講義」なるものも当然せねばならなかった。講義をする以上、然るべき理由がない限り、毎年新しい題目にすべきだと思っていたから、甚だつらかった。しかし、講義の出来・不出来は別として、お蔭で勉強になったとは言えるから、その意味では、全然無駄なことをしたとは思っていない。

一九四五年夏、戦争が終って、学校が少しづつ落ちつきを取り戻すようになって、疎開した書物や資料の整理が、まだ十分にできなかったし、何よりも数年に亙る不毛空白が祟り、直ちに所謂「講義」するわけにはゆかず、何年かの間は、所謂「講読」や「演習」で、専ら責をふさがざるを得なかった。

戦後初めて行ったやや形をなしただけの講義は、本巻収録の『フランス・ルネサンス文芸思潮序説』（一九四八年—一九四九年）だった。これに続いて、同じく本巻収録の『フランス・ユマニスムの成立』（一九五〇年—一九五一年）と題する講義をした。その外には、『フランス・ルネサンス・ユートピア文学序説』『フランソワ・ラブレーの作品構造』『フランソワ・ラブレーの作品（『第一之書』から『第四之書』まで）の進展』というような題目の講義もしたが、各々が何年度のものであったか全く失念してしまったし、それを確める手がかりは、少くとも目下のところ、私の手もとにはない。しかし、瑣事である。

一九五五年から一九五九年まで、『十六世紀フランス語文法概説』という身のほどを弁えぬ講義を、悲壮な気持で五年間続いて行ったが、大変勉強になったと同時に七転八倒の苦しみも味った。その間、毎時間学生に配布するプリントを作るために自らガリ版を切り、それを短時間内に印刷する労苦は、二代に互る助手（現東京大学教養学部助教菅野昭正氏と現明治学院大学教授清水徹氏とのお二人）に引き受けていただいた。忘じ難いことである。

一九六〇年から定年の一九六二年までは、『フランソワ・ラブレール研究序説』と題して、それまで断片的にラブレールについて講義したり講読や演習でラブレールの原文を学生諸君といっしょに読んだりした結果新たに判明したことや、ラブレールの翻訳途上において調べたことなどを一応まとめ、毎回異った主題の講義をした。そして、最終章にいたらぬ前に定年退職となったので、結局は尻切れ蜻蛉とんぼになってしまった。しかし、ラブレールに関して講義したことは、何かの形で全部、本「著作集」『ラブレール雑考』上下両巻に収めてある。

背伸びをしながら行っただの講義も、私の能力・才幹・体力の限界内のものであり、日進月歩する研究の水準から見ても、幼稚粗笨なものである。従って、これらを新たに書物として公刊することは憚られた。

本巻に収めた二つの講義にせよ、同じ評価しか与えられないのであるが、私の臆面なさの結果か、両者とも既に単行本として上梓されて居り、本「著作集」の顧問格の方々の御意向もあり、今更これを陰蔽するわけにはゆかなくなり、再び臆面もなく、収録することにした。『フランス・ルネサンス文芸思潮序説』のほうは、先に記した通り、『フランス・ユマニスムの成立』よりも先に講義したものであるが、単行本となったのは、前者のほうが後（一九六〇年）であり、後者は先（一九五八年）に上梓されていた。本巻では、単行本の出版年代順ではなく、講義をした年代順に従った。「小序」とあるのは、単行本に添えた時の端書である。

なお、右記二つの拙著を本巻に収録するに当っては、現在の私として、できる限りの訂正補加はしたし、その後披見し得た僅かばかりの参考書名も追加した。しかし、昔の「管見」を全面的に訂正するだけの「進歩」は私に見

られなかったように思うから、訂正補加をしたと言っても自ら限界があることは申すまでもない。また、私が最近参考し得た書物にしても、甚だ限られたものであり、参考書目は、結局のところ、研究書目というよりも私の読書記録に外ならず、私の所謂「行動半径」の短さを示すだけのものだろう。読み且つ教えられる名著好論は、外に沢山ある筈である。引用のフランス語原文は、新たに多少増加したが、拙訳だけでは心細かったからだし、若干興味ある文献もあるかもしれぬと考えたからである。

本巻が成るに際して、校正その他で、再三のことながら、東大文学部助教授二宮敬氏に多大の労をおかけしてしまったし、東京女子大学助教授久米あつみ夫人からも、有益な御指示を得た。「略年表」を編むに当っては、立教大学文学部助教授新倉俊一氏にお手伝いを願ったし、「索引」の作製に当っては、再び蘆野徳子嬢の御忍苦を必要とし、同嬢も、それを快く甘受されたらしい。このように、知友諸氏が、助けてくださったことを、しがない老残の身の私は、深く、深く、感銘している。

一九七〇年 晩秋

渡辺 一夫 識

(一)二宮敬氏の御教示によれば、この三つの講義は、一九四九年—五〇年、一九五一年—五二年、一九五二年—五三年の順でなされたものの上である。(T&V, 1971)

A

フランス・ルネサンス文芸思潮序説（一九四八年—一九六〇年）

小序（一九六〇年）

一九四八年から一九四九年にかけて東京大学のフランス文学科学生を対象として、『フランス・ルネサンス文芸思潮』と題する講義を行った。私としては、フランスのルネサンスが、少くとも日本における文化史研究上で、とかく看過されがちであるか乃至影が薄いかするのを不審に思っていたので、学生諸君とともに、フランスにも、国民性による差異はあるにしても、イタリヤ、ドイツ、イギリスその他のヨーロッパ諸国と同じ程度の、また同じ種類の歓喜や苦悩が、ルネサンスという文化的変動期において見られたのではないかということ調査してみようと思つたのである。その結果、ヨーロッパのルネサンス全体について抱いていた概念中に含まれていた様々な問題が、フランスにおいても、「人間」の前に提出されていたことが若干判明したように考えた。

また、フランス語学・文学の鑑賞的入門者にすぎず、思想史・文化史全般に関しても甚だ粗雑な理解しか持ち合わせない私が、かくのごとき問題と取り組むことは、正に盲人蛇に怖じない行為であつたが、日本における従来のフランス・ルネサンス文学研究が、華麗典雅な文芸鑑賞紹介に専ら走りすぎて、時代の暗流や現実を、文化史的・思想的に考究する面が手薄のように感じていたので、フランス・ルネサンス文学研究の準基本的な智識を、自らも整理し、でき得れば学生諸氏の参考にも資し、将来立派なフランス・ルネサンス文学研究者が輩出するのに少しでも役立たせたいと敢て望んだにすぎない。

一九四八年から一九四九年へかけて行つた講義は、その後、若干補遺訂正を加えて、東京大学以外の学校でも、一二度行つたことがあるが、歳月がたつにつれて不備が目立ち、半ば放棄したまま今日にいたつた。その間、この粗笨な講義中に散在した様々な問題を、個々別々に引き伸ばし展開させて、新しい講義にまとめあげたり雑文の種にしたりもした。東京大学その他における講義『フランス・ルネサンス・ユートピア文学序説』や『フランス・ユマニスムの成立』（岩波書店刊）（本巻収録）が、それであるし、『フランス・ルネサンス断章』（岩波書店刊）、『三つの道』（朝日新聞社刊）（この二書は、合本されて『フランス・ルネサンスの人々』という題で白水社から刊行され、本『著作集』第四巻『ルネサンス雑考』中巻に収録）『ある古い日記のこと』（『心』連載）（『泰平の日記』と題して白水社から単行本として刊行され、本『著作集』第九巻『乱世・泰平の日記』に収録）などもその間の所産である。

今度（一九六〇年）岩波書店の求めにより、十年前に行つた講義の草稿を基にして本書を編んだが、できる限りの訂正補遺を加えたつもりである。しかし、昔あの稚劣な講義を聴講して下さり、今でも常に私を啓蒙して下さいている若い優秀な友人たちから見れば、多大の欠陥誤謬が残されているに相違ないことは覚悟している。こういう方々には、本書を老残教師の「思い出の記」として眺めていただきたいし、もう二度と再びこの種の講義を行い著書にする暇も力もない私に、文献の不備・解釈の遺漏について御教示いただきたいと思つてゐる。

本書が、一般識者のお眼にふれることがあつたら、とかくフランス文学の鑑賞という狭い視野にしか立てない私が看過してしまつた重大な事実や問題について、同じく御教示賜りたい。

なお、本書は、フランス・ルネサンス文学史ではないから、普通の文学史に出てくる作家全部に詳しく触れるわけにはゆかなかつた。主要な「思潮」と思われるものを解説しながら、なるべく文学史と併行するように意を配つたつもりであり、詳しく触れられなかつた重要作家については、少くともその姓名を挙げて、読者の注意を喚起し

ようと努めたが、文学史ではないという根本条件のために、敢て割愛してしまった人々の名が甚だ多いことを特記して置かねばならない。

十年前に、背伸びをしながら行った講義が、とも角も新装をまとい得て、印行されるにいたったことは、私に、片輪な我が子が学校へ通えるようになった時の親の気持に近い感慨を抱かせざるを得ない。うれしいけれども、心配なのである。

本書は、『フランス・ルネサンス文芸思潮序説』と題した。全くの Introduction (序説)だと信ずるからである。もっと精到な「序説」と博大な「本論」とが、いずれ有為な人々の手によって書かれることを、心から希っている。最後に、本書上梓に際し、様々な御配慮を賜った岩波書店の大野欣一氏に、厚く御礼申上げたい。

一九六〇年

本郷富士前町にて

渡辺 一夫